廃校を活用した敷地地区の地域再生デザイン構想の具現化

静岡文化芸術大学　文化政策学部文化政策学科　都市・地域ゼミ
指導教員：教授　藤井康幸
参加学生：栗山 紫央里、酒井 美緒、杉山 菜奈子、鈴木 優真、
田中 悠貴、田中 祥仁、千田 綾夏、長橋 成代、安岡 航輝

1. 要約

本研究の目的は、磐田市北部に位置する敷地地区を含む豊岡地区の地域再生デザインの具現化である。

産官学連携のもと、延べ 4 回のワークショップと現地視察を実施した。研究全体のテーマとして「地域の探究」を掲げ、敷地地区にある廃校の利活用にとどまらず、豊岡地区全体をフィールドとして、農業、地域文化、イノベーションの視点から総合的に、地域再生デザインの検討、提案を行った。参考事例として、西伊豆町ほかの伊豆地域における地域活性化施策、廃校利活用について事例研究した。そして、昨年度提案した「干し柿ロード」の実行性を探るべく、大学構内及び敷地地区現地の交流センターにて干し柿づくりのポスター展示、アンケート調査を実施し、デザイン構想をさらに深めた。

2. 研究の目的

敷地地区は、静岡県の「ふじのくに美しく品格ある邑づくり」に参加するコミュニティである。地域住民の高齢化により廃校周辺の里地里山の保全が課題となっている現状を踏まえ、廃校利活用と合わせて、森林の活用のあり方を探ることを研究の目的とした。

旧豊岡東小学校(2015 年廃校)

3. 研究の内容

本研究においては以下を実施した。

(1) 現地でのワークショップ・視察

2023 年 8 月、10 月、12 月、2024 年 1 月と 4 回のワークショップと、2023 年 11 月に現地視察を実施した。

豊岡東地区環境保全協議会、磐田市自治会連合会、磐田市豊岡支所、磐田市豊岡東交流センター、静岡県中遠農林事務所農村整備課、株式会社キャタラー アーククリエイションセンター、コンセプト株式会社、磐田市地域おこし協力隊員、東京学芸大学、地域住民の方々(12 月)の参加を得て、意見交換した。

1) 8 月ワークショップ　今年度の検討方向の確認 「農村 RMO」

昨年度、農業従事者とのやりとりにおいて議題に挙がった JA に焦点を当て、JA の関与する「小さな拠点」(農村 RMO(regional management organization, 地域運営組織))の形成について事例調査、報告した。地元からは、廃校における週末農業の実施、地域全体における森林活用、地域資源の資産化などに関するコメントが出された。

2) 10 月ワークショップ　「グリーンツーリズム」「森林活用」

グリーンツーリズム、及び、森林活用(森林サービス産業)の 2 つのテーマを設定し、概念整理と事例調査を行った。出席者からは、グリーンツーリズムにおいては、体験一つひとつの価値、また、交通の利便性以上に、地域全体に回遊性をもたせることが重要であり、実行力のある中心人物、優れた広報活動が必要との助言を得た。

3) 11 月豊岡地区視察

(株)キャタラーの綿花畑と下野辺工業団地に隣接する森林、また、敷地里山公園(旧豊岡東小学校隣)、とよおか採れたて元気むらを視察し、豊岡地区の地域資源を再確認した。

4) 12 月「フルーツフル・ノールズ構想ワークショップ“どうする豊岡”」

豊岡東地区環境保全協議会主催の年次ワークショップでは、東京学芸大学の鉄矢悦朗教授による「螺旋と摩擦　STEAM 探求」新聞紙を用いた体験型学習の方策、(株)キャタラーによる地元の産品(赤紫蘇、お茶)を使ったスイーツの試食会、遠州大念仏保存会による大念仏の実演、(株)キャタラー社員のジャズピアニストバンドによる演奏などが行われた。

(2) 参考事例の訪問

豊岡地区の地域デザインを検討するため、2023 年 9 月に以下を訪問した。

1) 山田川自然の里(三島市)

ボランティアを中心とした「山田川グリーンツーリズム研究会」と三島市行政の協働による市民農園と里山風景を楽しむことができる散策路が整備されている。

市民農園の利用者は、定年退職した 60 代～70 代の男性、自宅に畑がない人が多い。山田川自然の里は市民農園の運営だけでなく、環境保全の役割も果たしている。里山保全整備地区には保全条件があり、カヤネズミなどの野生動物を保護するために草を刈る場所を決めるなどし、手入れがなされている。運営を担うボランティアの方は、子どもたちが思う存分自然に触れられるように生物多様性の保全を目標に掲げている。

2) やまびこ荘(西伊豆町)

やまびこ荘は、1973 年に閉校した大沢里小学校に対する地元住民の校舎保存の要望に応えて 1976 年に改修、開業された西伊豆町営の宿泊・交流施設である。2015 年からは指定管理者制度が導入されている。

自然に囲まれた場所にあり、一般の宿泊のほか、学校の宿泊体験やスポーツ合宿、会社の研修にも利用されている。建物には小学校時代の面影が残り、かつての教室は宿泊部屋として、25m プールは温泉プールとして活用されている。また、バーベキュー設備の貸し出しも行われている。西伊豆町役場職員によると、メディアの取材により利用者が増加しているとのことだった。

3) 西伊豆町役場まちづくり観光商工係

西伊豆町の令和 5 年の人口は 6,989 人で高齢化率は 52.6%と県内で最も高い。以前は水産業が盛んであったが、現在は観光業が主な産業となっている。観光客の内訳としては国内観光客が多く、ロケ地の誘致を積極的に行っている。観光プロモーションの一環としてデジタルサイネージを活用しており、訪問時点で 65 か所、町外にも 10 か所増設する予定とのことであった。今年度中に閉校予定の小学校の利活用について、ワークショップにより検討中とのことで、敷地地区の廃校の利活用を考える上で参考となった。

4) 中伊豆大見の郷「季多楽～きたら」(伊豆市)　グリーンツーリズム 豆腐づくり体験

中伊豆大見の郷「季多楽」はグリーンツーリズムの拠点として、特産品の紹介やさまざまな体験などを通して地域の活性化を図ることを目的とした施設である。事例調査訪問に合わせ、グリーンツーリズムの一メニューである豆腐づくりを体験した。プログラムには豆乳の試飲や豆腐製造工場の見学も含まれており、豆腐について学びながら作る過程を体験することができた。スタッフの方とアットホームな雰囲気で豆腐づくりをすることで学びと楽しさが共存し、記憶に残る観光となっている。最近では、地域の実情に合わせて外国人観光客向けのガイドを用意し、彼らの受け入れ体制を整えていた。

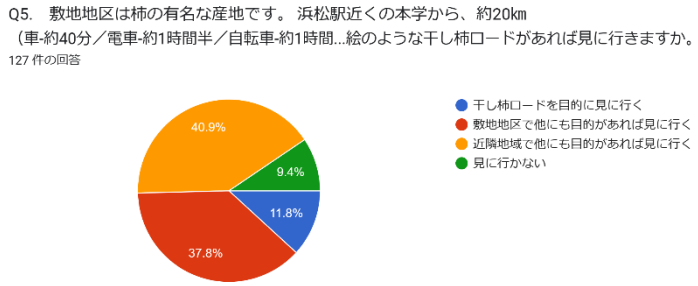
(3) 昨年度提案の具現化へ向けた検証

昨年度に提案した「干し柿ロード」の実現可能性、及び、敷地地区の PR や関係人口創出への効果を検証するため、以下を実施した。

1)　干し柿づくり
敷地地区名産の「立石柿」を使って、実際に干し柿を作った。

実際の干し柿制作の様子

2)　静岡文化芸術大学構内での干し柿づくりのポスター展示、アンケート調査
ウェブアンケート調査を実施し、127 名(うち、学生が 86%)からの回答を得た。



上述の設問に対して、約 1 割が「『干し柿ロード』を目的に見に行く」と回答したが、他の選択回答における自由記述から、距離・アクセス・時間のハードルに対して、「干し柿ロード」以外の目的が必要との指摘がなされた。目的となりえる魅力あるものを聞く質問では、「食」「景色」「体験」に関する回答が多く見られた。

3)　敷地地区での干し柿づくりのポスター展示
豊岡東交流センターの展示スペースにて、干し柿づくりのポスター展示を行った。

4.　研究の成果

(1)　当初の計画

①昨年度 12 月の提案をもとに、地元特産品を使ったシンボル(干し柿ロード)の制作を具体化する。②敷地地区で想定される関係人口に関して、例えば、SNS を利用した地域資源の広報戦略、耕作放棄地の活用、地産地消のマルシェ、また、事業内容のアイデアを提案する。③内部人材並びに外部人材の掘り起こしにより、地域活性化のプラットフォームを担う中核施設のあり方とその管理運営方策を検討する。

(2)　実際の内容

B：　以下のように当初の計画を変更して研究活動を展開した。

①については、実際に干し柿を作ったが、干し柿制作中に鳥が来てしまうことの懸念から、学内で干し柿の制作と展示をすることができなかった。②については、森林活用をテーマに事業例及び事業案を 10 月のワークショップにて発表した。③については、8 月のワークショップにて「小さな拠点」(農村 RMO)の動向を報告し、敷地地区における展開方向について議論した。地元の中核組織である豊岡東地区環境保全協議会は、農村 RMO を目指す意向であり、今後につながるゼミ活動となった。また、事例研究として訪問した伊豆地域では、地域活性化のためのプラットフォームと運営主体、内部と外部の人材のあり方を考察し、その結果を敷地地区の関係者に報告した。

(3) 実績・成果と課題

敷地里山公園では、地元住民が市民の憩いの場づくりに参画し、交流を生み出すための空間が形成されている。敷地地区はグリーンツーリズムに取り組む基盤が整っていることがわかった。伊豆地域の現地訪問調査からは、耕作放棄地や森林に人の手を入れることによって、生物多様性の維持だけでなく市民の憩いの場としての機能を果たしていること、グリーンツーリズムの体験を通じて、観光のニーズが体験型に移行していることを体得した。敷地地区での干し柿づくりのポスター展示により、本ゼミ事業の成果を地域住民に周知することができた。

敷地地区、より広く豊岡地区全体の地域デザインを進めるにあたり、全体をマネジメントする組織の必要性が浮かび上がった。

(4) 今後の改善点や対策

本ゼミ事業においてはこれまでも、地域デザインを担う中核施設、プラットフォームがこれまでの中心的なテーマであった。旧豊岡東小学校については、耐震面で問題のある過半の校舎を解体し、残りの部分を地域づくりのための空間として活用する予定である。しかし、北隣接の裏山が土砂災害特別警戒区域に指定されているため、廃校利用に着手できていない。そのため、今年度の研究活動では、当初より並行して検討を進めてきた廃校活用と敷地地区全体のうち、敷地地区/豊岡地区全体の検討に軸足を移すこととなった。

ゼミ、地元ともに本課題の関係者は、プラットフォームを場と組織という 2 つの意味で使用している。今年度の活動を通じて、敷地地区/豊岡地区において農村 RMO の形成を目指す方針が打ち出された点は大きな成果といえる。今後は、組織としてのプラットフォームの形成を支援していきたい。

5. 地域への提言

敷地地区には既に、地域デザインの中核を担う組織である豊岡東地区環境保全協議会が存在する。当協議会がよりいっそう敷地地区/豊岡地区、磐田市全体、さらには、外部の関係者との協働を通じて、具体的な事業に着手することが望ましい。農村 RMO は中山間地域等におけるいわゆる「小さな拠点」の形成を目的に組織され、国の「まち・ひと・しごと創生施策」で登場して以降、全国的に大きな広がりを見せている。敷地地区/豊岡地区における農村 RMO の形成は、地域デザインを描くための大きな前進となるものとして期待される。

今年度のワークショップや現地訪問を通じて、豊岡地区にある米、野菜、果物など多種多様な「食」の資源を再確認した。今後は、これらの資源を組み合せて外部へ発信することや、現時点では本事業に深く関わりをもたない地域住民も巻き込み、それぞれの技能・知識などの人的資源を結集することにより、地域の特性を活かした地域づくりに繋げたい。

6. 地域からの評価

最初の交流は、廃校跡地利用をどうするのかをテーマで活動してきましたが、今年で 3 年目に入り、新しい切り口での拠点施設としての組み立てが整ってきました。それは、農政からの政策で、農村 RMO という地域再生の土台となる組織体の拠点施設として活用する方法です。それには、行政と相談しながらロードマップが必要となってきますが、今後の具体的な活動として、農村連携促進支援事業に応募し、DX 社会に対応した地域教育のボトムアップを仕掛けて行く予定です。そのためには、これからも静岡文化芸術大学の技術・情報をご提供頂き、持続可能な組織運営体を構築して行きたいと願っています。

(豊岡東地区環境保全協議会　代表　乗松洋一)